



金石文叢稿本
上野
三十

特別
子10
4622
30



410
4622
30

陸路乃記上十少

上野國多胡碑

黒川真道蔵書



弁官苻上野國片正固郡緑野郡甘樂郡
並三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡
和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正
五位下多治比真人太政官二品穗積
親王左大臣正二位石上尊右大臣正
二位藤原尊

上野

多胡郡碑字考證

符 王羲之黃庭經

國 鍾繇法帖 羲之曹娥碑 虞世南法帖 蕭子雲法帖 皆作國

罍 漢仲定碑字樣 又右軍法帖

綠 古碑帖多作久 又王僧虔法帖

給 羲之十七帖 又右軍瘞鶴碑字樣

四 孫叔敖碑 又梁高帝唐太宗並作四 又王獻之法帖

寅 褚遂良陰符經、又張旭書、
正 王右軍法帖、
治 羲之黃庭經、
真 同上、又瘞鶴碑、
政 王右軍沂陽縣龍泉山普濟禪院碑銘、
禔 禔 古多禾从木、
尊 王獻之法帖多作尊、又褚遂良法帖、

大八洲学会雜誌卷八(廿五頁)

内藤恥叟曰上州多胡碑給羊ノニ字前人ノ考ア
レド未夕明解ヲ得、不愚案ニ羊ハ養ノ畧字ニテ
給養ナルベシ其故ハ説文ニ養供養也从食羊聲
教古文養トアリ教ノ古文養ナレバ教ヲ略シテ
羊トセシコト明ナリ又詩經邶風ノニ子乘舟ナ
ル中心養ニ亦雅ニハ中心洋ニトシ又注ニ養通
作恙恙憂也トシ又淮南子ノ注ニ洋水或作養水
ト見ユ猶逍遙ヲ猶羊ニ作りシ如キ類ハ羊ルニ
逞アラズ又古文普通ノ字ヲ假リテ互ニ相通用

ルコトハ其例證ヲ舉ルマデモ無ク至テ多キ
コトナリ試ニ省畫ノ例ヲイハド元嘉刀銘ニ祥
ノ字ヲ羊ニ作レル類亦多シ且古微書ニ春妹説
題辭ヲ引テ羊者祥也合ニ而生以養生也トアリ
コレ羊ノ字ニ既ニ自カラ養ノ義ヲ含ミタルコ
ト亦知ルベシ唯唐以前ノ古文ニ養ノ字ヲ羊ニ
作リタル確例ヲ見出ガレドモ博雅ノ君子必コ
レヲ見出シ人モ有ント考ヘラル、ナリ此ハ一
己ノ僻案ニシテ固ニ取ルニ足ラザル説ナレド
聊録シテ以テ大方ノ君子ニ質込又曰或曰羊ハ

平韵ニテ養ハ反韵ナレバ羊養通用セズコレ
ハ拘泥ニ過タル説ニシテ然ラハ詩經ノ養ニテ
洋ニシテ作リタルモ洋ハ平字ニテ羊ト同韵ノ字
ナルヲイカン

多胡郡碑面考證

東都

平麟

景瑞

著

上毛

高克明子啟

鑒定

碑在多胡郡池村

弁官

職原抄云辨七人左右大辨二人左右中

辨二人左右少辨二人近衛中少將中有

才名之人遷任辨官或兼之又為規模矣

姑 郡成給羊義未詳土人呼為羊大夫碑故始從土人

所傳記此如左

塩谷二堰者小幡羊大夫之邑也嶮巖險

阻獸不能走其巔有巨巖俗稱御前石又有八束城接八束嶺因得此名焉羊氏每朝京師必乘龍駒一豎從之豎脰入尺故曰八束小脰和銅四年人或上變告羊氏欲反狀主將其率官兵以擊之羊氏不能拒戰單騎遁走至池村而自殺其首拔飛墜於池村就葬立碑今尚存龍駒亦逸至馬庭村飛躍昇天今之馬庭山瑞雲寺即其處也羊氏之宰從羊夫人而逃至落合村為官兵所逼夫人及七嬪與宰皆死有

七輿山宗永寺即此也池村民家患瘧者禱於羊氏祠則止乃采水中之石以祀其神云爾

成多胡郡續日本紀云和銅四年三月辛亥割上野國甘良郡織裳韓級矢田大家綠野郡武美片岡郡山等六郡別置多胡郡按碑蓋此取所建

和銅四年三月九日甲寅迺元明天皇四年唐睿宗景雲二年也至寶曆六年丙子千四十六年

多治比真人續日本紀和銅中稱多治比真人者多矣未詳名誰

穗積親王石上尊藤原尊公卿補任云和銅四年辛亥知太政官二品穗積親王左大臣正二位石上朝臣麻呂右大臣正二位藤原不比等

尊

石上藤原字下尊字蓋取義於朝臣耳按萬葉集載石上乙麻呂卿配土佐國之耽歌三首其一曰石上振乃尊者弱女乃惑爾緣而馬自物

繩取附肉自物乃笑圍而王命恐天離夷部爾退古衣又打山從還來怒香聞

又按聖武天平十一年三月石上朝臣乙麻呂坐姦久迷連若賣配流土佐國若賣配下總國烏云

按東涯伊藤氏查簪錄載多胡碑圖而碑中羊字石上藤原字下尊字並為蝕壞然今親觀其碑羊尊字昭然而在焉意曩觀者卒爾寫之遂以為蝕壞矣又東涯碑考曰碑在本鄉村界今屬長崎豫州之邑有

大樟樹、擁其傍、碑身半為所齧、今並無之。

碑面考證終

明治十七年八月廿九日午後寫

統昆陽漫錄抄

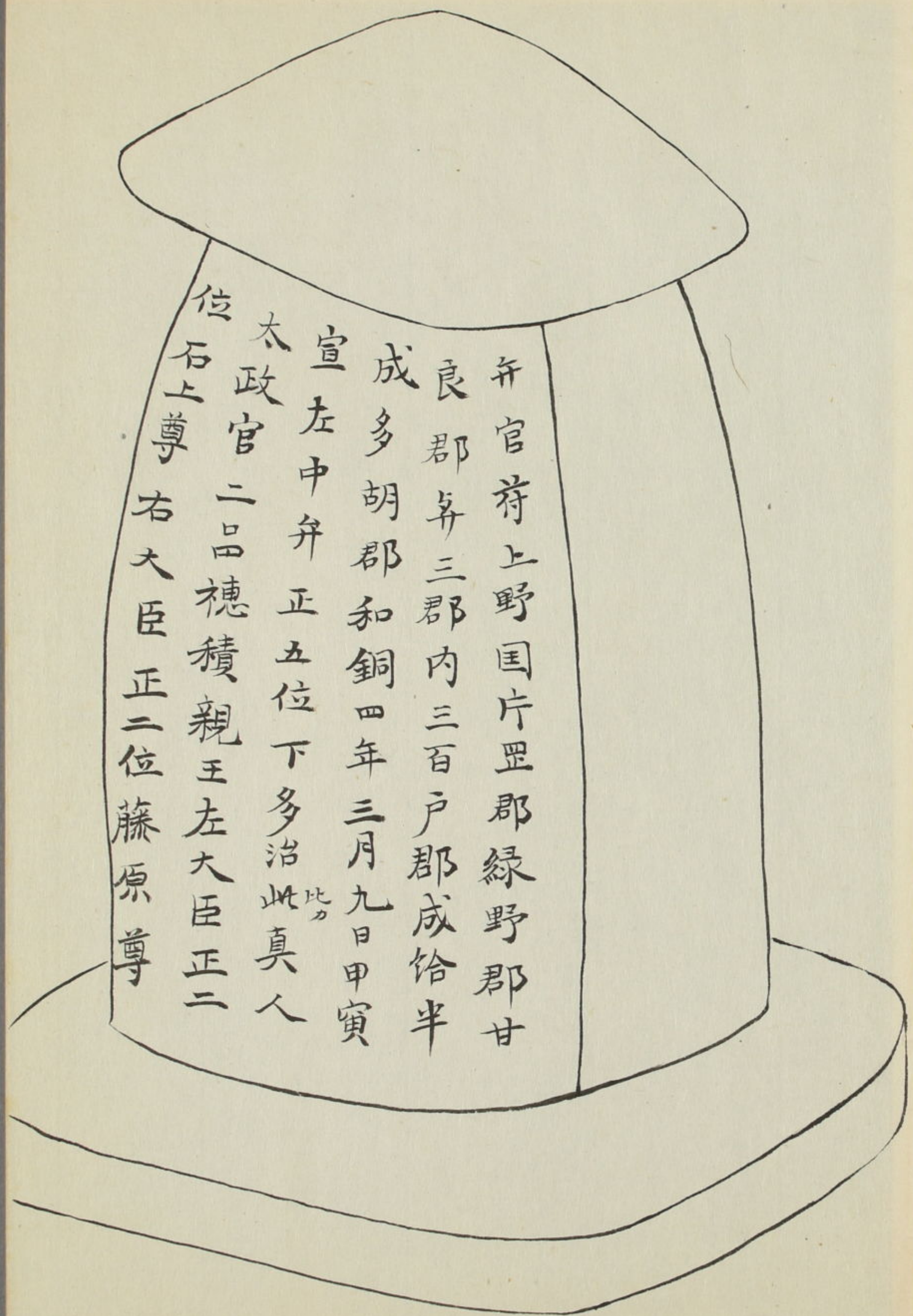
青木昆陽

多胡郡碑

延享二年、此碑ヲ夜詔小録ニ載スレド、先年小冊ヲ
集メテ昆陽漫録ニ収メ入ノ片、詳ナラサル事アル
ニ因テ之ヲ除ク其後コノ打碑及ヒ安原貞平著ス
輿憲隨筆ヲ見テ詳ナルコトヲ得ルニ因テ記ス或
人嘗テ敦書ニ語テ曰ク其地ノ田夫云傳ルハ上野
國多胡郡下池村ノ碑ハ小幡半大夫勝宗按スルニ
ニ小幡氏見エサレバ和銅ノ片小幡氏アルベカラ
ス、統呂本紀ニ慶雲和銅ノ口從四位下布勢朝臣
耳麻呂為左京大夫アリテ半大夫ノ名真人右前
大夫又攝津大夫アリテ半大夫ノ名真人右前

宗和銅ノ頃ノ人名ニ似ズ半ハ其人ノ名ナルノ墓
 碑ニシテ久シク覆ノ下ニ倒レ有シテ今ハ九尺四
 方ニ石ヲ敷キ其中ニ碑ヲ建テ石垣ヲナシ石垣ノ
 外ノ左右ニ石燈ヲ置石垣ノ傍ニ小祠ヲ建且碑文
 ノ右ニ大ナル文字有リシト見ユレバ元來今ノ碑
 面ノ後ト左ヨリ昏統ケテ今ノ正面ハ碑ノ左ナル
 一ケレ氏三面缺テ文字見エス其近キ地ノハ束ニ
 半大夫ノ墟アリ其地ノ寺社ノ記録ニ半大夫ノ事
 アレトモ詳カナラス貞平ノ説左ノ如シ

上毛多胡郡碑圖



并官符上野国片罌郡緑野郡甘
 良郡并三郡内三百戸郡成恰半
 成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
 宣左中并正五位下多治此真人
 太政官二品德積親王左大臣正二
 位石上尊右大臣正二位藤原尊

碑身自首至跗三尺九寸六分，身上一尺四寸四分，下一尺九寸六分，有奇。其上上狹，下洞，其蓋方二尺四寸。右上方高克明所摹以行于世，別有打碑一本，文字古而有法，今之所不及，亦可觀前代典章之隆矣。

蓋簪錄曰：此碑在野州多胡縣本鄉村界，今屬長崎豫州之采邑。有大樟樹擁其傍，碑身半為所齧，土人呼為半大夫之社，不知何故。或以為穗積親王之墓，不知前世置縣之碑。按統日本紀云：和銅四年三月辛亥，割上野國甘樂郡織衣韓級、矢田大野家、綠野郡武美、片母郡山等六鄉，別置多胡郡。碑蓋此所建。又按慶雲三年

二品穗積親王知太政官事，和銅元年石上麻呂任左大臣，藤原不比等任右大臣，故碑上各列名銜。但石上藤原字下字蝕不明，以上例推之，當各有朝臣字。觀之則前敗王化之隆，郡國并省建置，必有表碣以徵。後不但陵谷變遷，水火熬蕩，今不復存，殊增考古者之一慨。

多胡郡碑考證

碑在多胡郡池村

郡成給半，義未詳。土人呼為半大夫碑。民家患瘡者，禱則止，乃采水中之石以祀其神云。

和銅四年，迺元明天皇四年。唐睿宗景雲二年也。至寶

曆六年丙子千四十六年

多治比真人統日本紀和銅中稱多治比真人者多矣
未詳名誰

石上藤原字下尊字蓋取義於朝臣耳按統日本紀云
聖武天皇天平十一年三月石上朝臣乙麻呂坐軒久
迷連若賣配流土佐國若賣配下總國烏萬葉集載石
上乙麻呂配土佐國敗歌三首其一曰石上振乃尊者
云々

伊藤氏蓋簪錄載多胡碑圖而碑中半字石上藤原字
下尊字並為蝕壞然今親觀其碑半尊字昭然而在焉

意彙觀者卒爾寫之遂以為蝕壞矣又曰碑在本鄉界
界今屬長壽豫州之采邑有大樟樹擁其傍碑半身為
所齧今并無之

符 王羲之黃庭經

國 鍾繇法帖羲書娥碑虞世南法帖蕭子雲法帖
作國

罍 漢仲定碑字樣又右軍法帖

綠 古碑帖多作乞又王僧虔法帖

給 羲之十七帖又右軍瘞鶴碑字樣

四 孫升教碑文又梁高帝唐太宗並作四又王獻

之法帖

寅 褚遂良陰符經又張旭書

正 王右軍法帖

治 羲之黃庭經

真 同上又瘞鶴碑

政 王右軍沂陽縣龍泉山普濟禪院碑銘

穂積積 古多未从

尊 王獻之法帖多作尊又褚遂良法帖

東都平麟所著考證上毛高克明鑒定脈子
其涉繁縟暨倍傳不足徵者不錄

又按吾邦古之制諸國置國司郡司其郡司並取本土
人性識清廉堪取務者為大領小領猶中國土官也考
碑面所載當取蓋有半氏者任郡領賜多胡郡邑三百
戶史失其傳其蹟不詳今邑人所說亦多托奇不可據
信焉

右輿窓隨筆

按スルニ延享中ニ聞田夫之說ノ今ソノ取ニアラ
ス凡遠年ナル可ラサレハ享保以前ハ此碑樹下ニ
倒レ埋リ文字見エ難カルベシ或云三百戸ハ一郡
トナスニ足ス日本紀ニ大化二年凡郡以四十里為

大郡三十里以下四里以上為中郡三里為小郡トア
レハ三百戸ハ中郡ナルベシ延喜ノ片コノ制ヲ改
メラレタレハ延喜式
千戸トアリ凡郡不得過倭名鈔ニ胡音如吳トアリ今モ江州
高島郡多胡庄ヲタコト読ハ古ハ吳ノ音ニヨミシ
事明カナリ万葉集ニ石上振乃尊者トアレハ石上
ハ布流ノ社アル地名ナレハ石上朝臣ノ支工石
上振乃トヨミツケタルモノニテ尊ハ貴フノ詞ニ
シテ万葉集ニ吾父母ヲ貴ヒテ父ノ尊母ノ尊トア
マタ詠シアレハ朝臣ノ義ヲ取ルニ非ズ且統日本
紀ニ和銅四年三月辛亥ト有テ此碑ニハ甲寅辛亥
ヨリ

甲寅マテ四日ヲ経テ宣命トアリ官ヨリ建ル碑ニ
多胡郡ニ到ルナルベシ辛亥ヲ書ステ甲寅ヲ書ヘカラス宣命ノ名銜ニ
朝臣ヲ尊ト書ヘカラス田夫ノ説ニ今ノ碑面ハ正
面ニ非ストイヘバ必縣ヲ建ルノ碑トモ云難シ依
テ考ルニ半郡ヲ賜リテ自官ノ徳ヲ頌シテ建タル
碑ニ工宣命ヲ書ス甲寅ト記シ朝臣ヲ貴ミテ尊ト
書シナルハ然レハ其書古雅後人ノ及フベキニ
非レハ和銅中ニ建タル碑ナルベシ

明治七年十月十六日午後寫此日風雨迅烈

武州比企郡平村都天山慈光寺觀音院寺領百石
緣起ニ日ク孝徳帝ノ片役小角開基室物大般若
經六百卷安部小水麻呂昏写

貞觀十三年上野國權大目安部朝臣小水麻呂大
般若經經奉納コレヲ羊ノ大般若經ト稱ス此人
上洛スル毎ニ百余里ノ山河行程ヲ羊ノ一取ニ
參着セリ因テ堂上ニテハ羊ノ大夫ト呼タリト
ゾ

見武藏演露比企郡下

母古小録卷上九曰碑上野國多胡郡池村ニ在
 リ按統日本紀云和銅四年三月辛亥割上野國
 甘良郡織裳韓級矢田大家綠野武美片野郡山
 等六郷別置多胡郡此碑始テ多胡郡ヲ置一シ
 時建タル碑也土人誤テ羊大夫ナル者ノ碑ト
 シテ牽合附會ノ説アリ村民故変ラ談ズルノ
 憑據ナキ者論スルニ足ラズ○并テノ誤ナラハ
 戸郡成給半成多胡郡ト多治比真人麻呂○穂
 ト読テ其義通ズベシ慶雲二年九月詔ニ品穂積
 積親王親統日本紀云慶雲二年九月詔ニ品穂積
 太政官事一呂穂積也○石上尊
 天武天皇之第五子也○石上尊
 銅元年三月右

大臣正二位上麻呂朝臣為左大臣養老元年
 三月癸卯左大臣大連物部目之朝臣麻呂養老
 泊瀨朝倉朝臣大連物部目之朝臣藤原尊統日
 難波朝衛部大華上宇麻之也藤原尊統日
 云和銅元年三月大納言正二位藤原朝臣正
 等為右大臣養老四年八月癸未右大臣正位
 藤原朝臣不比等薨大近江朝臣尊云至貴日
 尊自餘大臣織冠鑲足之第二子也○尊云至貴日
 尊自餘大臣織冠鑲足之第二子也○尊云至貴日

羣書一覽卷二百七丁ウ

多胡郡碑

楷各六行八十一字并官符上野国云々此碑之事輜軒小
 録云曰く上野国多胡郡本鄉村と云ふ所小古碑石あり古来
 穂積親王の墓碑といひ傳ふ其上小古き樟樹有く生か
 る碑身半と樹の如く近き海其碑の委細を尋
 めれば其碑高二尺四寸横二尺厚一尺八寸五分其下
 臺あり上小覆石あり中又りく平尾の如し三尺四方
 厚六寸碑面小記云并官符上野国片岳郡緑野郡甘良
 郡并三郡内三百所郡成給□成多胡郡和銅四年三月

九日甲寅宣左中弁五位下多治真人大政官二品穗積親王左大臣正二位石上口右大臣正二位藤原口依し続日本紀を考つて帝和銅四年三月割上野国甘良郡織裳韓級矢田大家緑野郡武美片岳郡山寺六郷別置多胡郡と碑を蓋此敗建るありとの文符節と合する如し太政官符と石に刻く後世の残るありまも按ずる慶雲三年二品穗積親王知太政官夏和銅元年石上麻呂任左大臣藤原不比等任右大臣碑文位署の連名亦此文と符合る碑文石上藤原の字の下文字分明るる石上の例を考ると各朝臣の字有るあり

一話一言卷二十五 三十二

大田蜀山

牛大夫宗長墓

寛政四亥年の暮小上毛野羊大夫の碑の近所宗長寺より

あり出せり 古き石より

牛大夫宗長墓

とありしとあり

明治九年七月廿三寫

柳庵隨筆 十六丁

栗原信充

多賀城碑を賴朝卿の書はく〜詠し給ひ壺碑
ありと云傳へ侍りに今猶南部の壺村といふ有て碑明神鎮
座まはを聞てハ多賀城碑ハ自ら多賀城碑や壺碑と異
る〜(因云多賀城碑朝鵬が位署統紀と違ふ)友人
狩苔望之の古京遺文より辨し置る)然も多賀城碑を
壺碑と云ふや人の知る所ハ多胡碑と云ふ古
有る〜知る人も稀く漸く長壽豫州の東涯に語る
その蓋替録に記せ〜普く人の知る処と云ふれしなり
(山吹日記に此碑の事を載る本文の意と同じ)世人の思い居れり

然——宗長東路の法（永正六年）河並去別當（たつ）
て（濱河も上野国羣馬郡あり）並松ハ並榎の誤なり同郡の
地名なり法然上人傳あり並榎豎者といふ人なり（色
うつろふ）（たつ）秋も——此別當俗長姓石上也並松
上野国多胡郡并官符碑文銘曰大政官二品穗積親王左大臣
正二位石上尊此文系圖有布苗社とあり（たつ）（たつ）本朝石
碑の古き昏あり——是此多胡碑を魁といひ（因云
此碑文の中に給羊といふ字あり藤貞幹が説く羊ハ半の字を
給羊といひあり）（たつ）源典清ハ羊養相通——
羊ハ山——小幡氏の祖なりといひ

給養といふは給羊と——といふは——統紀ハ此郡をき
見——何の故を記されし今辨——事なり
就中此郡の郡名ハ給羊といふ小なるありあり（たつ）
也（たつ）（たつ）終り記さるる何れも見——給
養の義も今少し事を勞らぬを穿ちて説をなす
貞幹、説のあり半の字ハ點畫を益し多ありあり（たつ）
や何とすれば養養辛辛損益ありあり唐人の筆ハ見え
しれハ羊半の損益もるあり（たつ）（たつ）成給
半とて備くる統紀の意あり（たつ）

上野名跡志初篇卷二

廿六丁

多胡碑

下池村小字名三門ミカドト云地ノ稻荷明神ノ社地ニ在
ル也。上野三碑考ニ云輜軒小録ニ上野多胡郡本
郷村ト云所ニ古碑有リ穂積親王ノ墓ト云傳フ其
上ニ古キ樟樹アリテ生掛リ碑身半ハ樹ニ隠ル高
サ云々横云々厚云々其下ニ臺石アリ上ニ覆石ア
リ中及テ平瓦ノ如シ云々碑面ニ記楷各六行八十
一字ト云此人ハ寛文元年ノ生ニテ元禄ノ頃盛ノ
人ナリ本郷村ニアリトアレド今下池村ニアリ其

世ニハ村境モ今ノ如ク定カニハ有サリシニヤ池
 村ハ本郷村ノ東ニ當リテ下池村ナリ蓋簪録ニ多
 胡碑ハ在上野国多胡郡本郷村墾ト見エタレバ即
 下池村ナルコト極リ又ト云和訓栞ニモ上野国多
 胡郡本郷村ニ古碑アリト云テ亦多胡郡ノ碑ハ今
 池村ニ現在ストアリト初ハ本郷村ト聞ルニ後ニ池村
 ニハ上野郡多胡郡真井村ト聞ラリニヤ集古十種
 聞ケド真井村ト云フコトハ碑トアリ井池村ノ古名
 ヤ上野国多胡郡下池村ノ古碑寸尺諸各不同少
 宛違アリ上野三碑考ニ正面高四尺一寸五分横潤
 同断高五寸五分上二尺二寸五分石正面二尺九寸横
 又管笠ノ如シト云蓋簪録ニ云上野州多胡縣本

郷村界有古碑高横厚云々鑄八十字統日本紀云和
 銅四年三月辛亥割上野国甘良郡織裳韓級天田大
 家緑野郡武美片岳郡山等六郷別置多胡郡蓋此取
 所建也諸国古碑考ニ云東江平麟書詒曰宝曆甲
 戌ノ秋某上野国ニ遊シ片南牧ノ高橋子啟ト同ク
 多胡郡池村ニ至リテ古碑ヲ見ル碑文ニ曰云々統
 日本紀ヲ按ニ和銅四年云々別置多胡郡トアレバ
 此碑ハ其取ニ建ラレシナルベシ只碑文ノ内ニ給
 羊ト云コト有リ義ヲ詳ニセズ土俗傳言ヲ聞ケバ
 此所ニ羊ノ大夫ト云シ人アリ云々是等ハ證トス

ニキ夏ニモ有子ド、今モ古跡也トテ残テアレバサ
ル人有シカモ知ズ石上尊尊ノ字朝臣ト昏ベキ所
ヲタフトミテ尊ノ字ニ昏ルナルベシ真ニ稀代ノ
古碑ナレド誰人モ知ラス空ク草莽ノ間ニ埋有シ
ヲ何ノ幸ニテカ斯見ル事ヲ得タリト云同昏ニ伊
勢氏安齋翁曰三郡ノ内三百戸ヲ郡ト成シ給羊多
胡郡ト成スト読ベシ郡ト成給フ如此昏ヤウ此国
ノ古昏ニハ多例アリ郡ト成シテト読ハ誤也羊此
羊ノ字ハ半ノ字ヲ昏誤タル也此邦ノ古昏ニハ間
誤モ有コト也半ノ字玉篇ノ注ニ物ノ中分トアリ

ワカツテト読也然ルヲ誰人カ其誤ヲ推察セズ單
ニ給ト読シヨリ羊ヲ人ノ名ナリト思ヒ刺大夫
ノ号ヲ添テ羊ノ大夫ノ墓銘ナリト云傳ハ腹ヲ捧
テ絶倒スルニ餘アリ云々和訓栞ニ云上野国多
胡郡ノ碑今池村ニ現在ス郡成給羊トアルヲ羊ニ
給フト読テ土人羊ノ大夫ノ碑トシテ其夏実ヲ云
ナリ郡成給羊トヨミテ羊ハ養ニ通ヘルナルベシ
云々山吹日記ニ云池村ニ至ル古碑アリ和銅四
年ノ夏ヲ鑄付タリ世ニ羊ノ碑ト云伊藤東涯ノ盍
簪録ニ出シタルヨリ世ニ知ル云々古夏記傳

ニモ近キホド見得タリト云、上野多胡郡ノ古キ碑
文ノ写ヲ見ルニ云、ト有リ、早ク宗長ノ永正六年
ノ紀行東路裏上野国多胡郡弁官苻ノ碑文銘曰云
云、ナド有ニハ心ツカザリシニヤ、好古小録ニ云、
上野国多胡郡池村ノ古碑案ニ、統日本紀ニ云、和銅
四年三月云、別置多胡郡、此碑始メテ多胡郡ヲ置
レシ中、建タル碑也、土人誤テ羊大夫ナル者ノ碑ト
シテ、牽合附会ノ説アリ、村民改変ヲ談ズルノ憑據
ナキ者、論スルニ足ズ、羊ハ半ノ誤ナラシ、并テ三郡
ノ内三百戸ノ郡トナシ給ヒテ、半ヲ成多胡郡ト読

テ其義通ズベシ云、群各一覽ニモ、太政官苻ヲ
石ニ刻テ後世ニ残セル也ト云、柳庵随筆ニ云、多
胡碑文中ニ給羊ト云字アリ、藤魚貞幹ガ説ニ、羊ハ
半ノ字ナラント云ヒ、或ハ羊ト云人、有テ某ニ給ヒ
シナリ、其羊ハ心シク小幡氏ノ祖ナリト云ヒ、又ハ
羊養相通ジテ給養ト云心ナルベシト云リ、去代統
紀ニ、此郡分タレシコト、何ノ故トモ記サレ子バ、今
弁ハ雞キ、夏ゾカシ、就中此程ノ郡一ツ給テシハ
小ナル夏ニ有子バセメテ、其夏ノ始終記サルベキ
ニ、何トモ見エ子バ給羊ノ義モ、今少シ夏是ハ又心

地ノスル穿テ説ヲナサバ貞幹カ説ノ如ク羊ノ字
ノ點畫ヲ増シタルニテモ有ベキカ云々山吹日記
ニ云シ如ク知ル人モ稀ニテ蓋簪録ニ記シヨリ
普ク人ノ知所トハ成リシナド世人モ思ヒ居レド
宗長東路裏ニ上野国多胡郡弁官苻ノ碑文ニ曰云
云ト有テ思ヘバ本朝碑文古キ各ニ見エタルハ此
多胡碑魁氏云ツベシ云々後上野志ニモ羊ノ大夫
ノ事ハ考所無シト云
関亭翁ハ群ノ字ノ傍各ナルベキカ古各ニ蜈蚣ヲ
吳公村ヲ寸枳ヲ只ナド各ル例アリ給群トハ給復
ナルベシ給復一年ナド古各ニ見エ一年ノ貢ヲエ

ルサハ、夏也郡司ノ朝政所又屯倉ナド作ニ民ヲ
役ヲ事多シ外郡ヲ分テ一郡ヲ立タル故ニ一年ノ
貢ヲエルサレタルト申義カ群ハ衆ト同ク大勢ノ
人ヲ云村モ郡ノ意ナレバ也トイハレキ上野名
跡考羊ハ文武天皇ノ皇子刑部親王ノ御諱ナリト
云一説アリト云刑部親王ハ天武紀ニ忍壁皇子九
ノ皇子ナリ
年六月甲子淨大参刑部親王云々天武紀ニ天武天皇四
年六月甲子淨大参刑部親王云々
益封ニ百戸同二年薨ナド官夏慶雲元年正月丁酉
見エレド御諱ノ夏ハ未詳上野三碑考ニ云羊ハ
統日本紀三大宝三年五月壬辰正七位上倉垣連子
人高祖根猪以来子孫正七位私小田道七位上私比

都自長島及昆弟等皆訴得免雜戸ト見エシ比都自
ニテ雜戸三百戸ヲ免シ給ヒシナルベシ松小田ヲ
訴テ貢田トナセシ功ニ多胡郡ハ廣カルベケレド
其内三百戸比都自ニ給テ郡ノ司トナシ玉ヒシナ
ラン此更大宝三年ニ訴テ豫免シ有テサテ和銅四
年ニ官符下リシナルベシ統紀ヲ案ニ三月朔日其
更始テ四日ニ太政官ニ更定九日ニ并官符ニ下リ
シナラン云々多治比真人ハ水守卿小録ニハ三宅
麻呂ト云穗積親王ハ小録ニ天武天皇第五皇子ト
云石上尊ハ麻呂公藤原尊ハ不比等公ナリト云尊

ハ朝臣ナリト古碑考ニイハド古更記傳ニ此頃尊
人ヲハ尊ト云シナリ朝臣ノ意ニソムノ音ヲ取レ
ルト云ハシヒゴトナリト云日本靈吳記考證ニ

上野国多胡郡ニ和銅四年ノ碑アリ并官符并ノ字
ハ即辨ノ字ト云カク給羊ノ文字ニ付テハ諸説アリ
群ノ傍昏ナド云モ稔ナラ半ノ比都自ノ説サモ有
シカ去ト其子孫ハイカニナリシカ聞エズ統日本
後人紀ニ承和十年上野国新田郡ノ人犬養ノ子羊
云人見ト云レ郡モ違ハ其先祖トモ思ハ子羊大
夫縁記ト云春ニ郡小幡太郎大勝定ノ一子羊大
宗勝朱鳥九年未云日未敗集ニモ羊ノ太夫ト申
朝廷ノ時ニ上野国多胡ノ莊ヲ立テ上ケルケ未
ス今ノ御物ニ沙汰ニ合テ中ノ敗ニハ國ハ下ケルケ未
ル云イノ神保山ニ八束山ト云アリ羊ノ大夫居城ノ

今字カ

池

斬

跡ト傳フハ東軍記ト云
 日ト羽ア参リ昼寐ト云
 葉ノ子内急ル傳雜羊見テ怪ミ供ス大夫駮馬ニ乗リ
 辰命越景行野連ノ子大紀トハ云社蒼海臣羽鳥連
 ハケ命越景行野連ノ子大紀トハ云社蒼海臣羽鳥連
 死ヲスヤ首飛テ内ハ判ニケル也ナク脛ノ長キ人ニ作ルベキ名
 テガ太宰府ヨ共ニ他テ宰少貳處ニ官軍下建ルトハ大信
 シリ多若胡ノ古麻呂ガ天朝廷ハ廣嗣七カ廣嗣綱手エ夕
 下新トシアラ官軍追カケテ多胡郡ノ人トモアラ紫ヨ去ド逃
 シト古麻呂ハモカニ此多胡郡ノ人トモアラ紫ヨ去ド逃
 シト古麻呂ハモカニ此多胡郡ノ人トモアラ紫ヨ去ド逃

百濟莊ト云韓級明神モ韓人ノ齋キニ神ナルベシ
 ト云リ統紀天平神護二年在上野國新羅人ノ子牛足
 バ韓人居住ノ地トハ聞ユルナリ羊ハカドモ見ユレ
 首長ナド郡人磯部牛麻呂方葉集ニ助丁上毛野牛
 統紀甘良郡人磯部牛麻呂方葉集ニ助丁上毛野牛
 耳統後紀ニ新田郡人犬養子羊弟真席ナド見ユ

日本題名殘碑

右日本國殘碑凡八十字。按碑文和銅為元明天皇
建朔四年。當唐睿宗景雲二年。歲紀辛亥也。日本城
地內有五畿外有七道。上野國為東山道所屬。八國
之一。本名上毛野。在渡瀨河之西。凡隸郡十四。片岡
甘良多。胡綠野皆其所屬。甘良志作甘景。中弁之職。
有左右之分。當正五位下。秩為朝議大夫。在國為重
職。擇華族中有才名者居之。執行宮中之夏。太政官
始設於天智天皇十年。至孝德天皇。改為太師。後
官仍復。原稱為文武之至極。助理萬機。左右大臣設於

とひく門を開し入りて是より杉杉の志を以て名を碑と
いふ一後高くと碑し其より西に四井ありと透垣し其
其より左官符上野国云々其より左官符の文より
更らり太政官の内左官右官と二局あり左官を京は
東とつらひ右官は京より西と掌其左官より上野の
司よりやういふ片岳緑野甘樂の二郡の内より三百戸を
拔り郡あり一ありれども三百戸俄に割ちて之を
まの其半百ありとて多胡郡とて之を治す郡
成給羊の四字古より傳得し人よりある羊字ハ人者ハ
く此人勲功ありしゆ其地を賜りし物とて傳記のち

寶三年青の件ハ從位私比都自長嶋及昆弟等云々とある自
の字を比都ハ傳傳多て此碑の羊字ハ附會あり今ハ
至て所の者も羊大夫と稱昔のわらを領する人死に
いしや一遂に六瑞雲等に羊大夫の寫る傳卷に寶物の中
に蔵ありとて古一郡縣ありし也此より之を人の作ら
ふく羊を半とて疑ひる一古書に半と半と半
とて之を類しあれ一畫折れし怪む一ありあり
和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人とあり弁
官より下とあり符よりあり中弁正五位上相嘗られし
狭き碑文をれし行守のふりしとて之を正するの事ハ

陸路乃記上十九ウ

上野國金井澤碑

上野國羣馬郡下賛郷高田里三家子
孫為七五父母現在父母現在侍家刀
自傳刀自道刀自之兒物部刀自孫物
部千足次駭刀自次興魚刀自合六口
又知識所結又三家人氏人麻呂次知
麻呂鍛師磯部君牛麻呂合三口如是
知識結而天地誓願仕奉石文神龜三

明治十六年二月廿三日字

年丙寅二月廿九日

母古小録卷上十一 曰明和申上野國高崎ノ山
崩レテ出ツ文義通ニ難ニ後考ヲ待ツ

條里圖帳考抄

本居内遠

上神龜三年ニ建タル上野國羣馬郡ノ碑ニ好古
=略載 上野國羣馬郡下賛郷高田里三家子云三家
ハ三軒ノ家ノ事ナルベシ下ニ三家氏人トアル
ノアレドモ性ニハアラズ別ニ考アリ
モ高田里ニシテ其里内ニ家居セル三軒ノ意ト
スベシ然ル故ハ天平七年ノ田地圖ヨリモ十二
年早ク神龜元年ニ里ノ名アル故ハ令ヲ撰ベル
ヨリ廿四年ノ後ニシテ里ヲ郷ニ改タル靈龜元
年ヨリハ其間總ニ十年ナレハ靈龜ニ起レル制
ナルベシトハ云ル也云々

上野名跡志初編卷二 廿一丁

神龜碑

根小屋金井澤ノ奥ニアリ、碑ノ在所ハ山名村ノ地
内ト云、上信日記ニ根小屋村金井沢ト云ニ到ル
村中ヨリ山路ニ掛リテ沢水ノ流ル、ライクラ石
無ク越テ不立茂リタル山陰ニ古碑ハ有ナリ、石ノ
サマ誠ニ古キ物ト見ユ云、山吹日記ニ金井沢
ニ神龜三年ノ古碑立リ、此山ノ傍ヨリ近キ頃掘出
シタリト云、今ハ八幡ニイハヒ祀レリ、云々、碑文ニ
下賛郷高田里トアリ、此碑ニ依レバ古ハ群馬郡佐

野村ニテ爰ヲ上佐野川ノ向ヲ下佐野ト云テ中ニ
 流ル、烏川ゾ佐野ノ中川ニテアリテシカシト云
 碑文ニ下賛郷トアルハ川ノ向ヲ下佐
 野ナリケントイハルハイカバナリ 集古十種
 上野国山名村ノ碑 母古小録ニ上野国下賛郷
 碑高一尺七寸許明和中山崩レテ出ヅ文義通ジ難
 シ後考ヲ俟ツト云不_レ平_レ缺_レ穴_レアリ私志ニモ見_レニ_レ碑_レ面
 讀ハ三碑考臆
 群一覽ニ楷_レ行_レ百_レ十一_レ字_レト_レア_レレ_レト_レ百_レ十二
 字アリ集古十種母古小録共ニ磨滅ノ處ニハ口
 ノ印アリ訣文モ二_レ昏_レ不_レ同
 カハレル処モ有ナリ云々

上野三碑考ニ云山名ノ碑ニ佐野三家ヲ定賜トア

リ三家ハ三宅ナリ三宅ハ調進ノ御穀ヲ納置ナリ
 刀自ハ戸主ニテ女ノ称名也麻呂ハ男也其三宅人
 ノ刀自六合麻呂三合知識シテ結テ天地ニ誓願三
 家ノ氏人ノ徒子孫ノ八十續遠ニ違フコトアラ
 ジト契約シ石ニ記置文也ト云日本靈異記考證知
 引テ言知識ハ猶今俗講中耳此_レ磨_レ利_レ帖_レニ此_レ碑_レ文_レヲ
 上野国ノ刀自ノ碑トアルモ此_レ碑_レノ事_レ也上野名跡
 考ニ云倉賀野ヨリ此_レ辺_レヲ高田ノ庄ト云此_レ碑_レニ高
 田里アリ東鑑ニ長掃部左衛門尉秀連ト菅野庄ヲ
 争シ高田武者所盛負ハコノ人ナルベシ云々
 承久記ニ高田武者所同小太郎 太平記ニ高田薩

摩守 鎌倉大草紙ニ上野一揆ニ高田越前守ナド
 見ユ上野國ノ神名帳西羣馬郡ニ從三位高田明神
マセリ此アタリカ但甘樂郡ニモ高田村ナル
 万葉集十四ノ卷相聞ニ左努夜麻尔宇都也乎能登
 乃等抱可騰母祢毛等可見呂賀於由尔美要都苗今
 野村ニハ山ヲシ佐野ノ郷ノ内ナレバ
 此アタリノ山ヲヨメルナルベシト云

陸路之記上ノ

山上碑所在
 又五所一より上り山の峯とゆふ十所一より下り
 道一をれど足の踏立一あつたぬあま一木艸の志一堪難
 キとあり一丹過一谷水の音を所一の勢あり一未事
 喉の乾きた一潤きん一河ふあ一此程乃雨一濁り一結
 ち一もあ一す一は一又其一谷一右あり一左あり一は一荆一棒
 の来一一一き一は一れ一は一中一を一攀一ち
 金井澤の碑のあり所一此碑を山上の一小競一れ一む一也一文字の
原書ニ全文アリ今異ス
 体も一ゆ一多一く一徳一は一ち一り一上野國羣馬郡下一賛一郷一云一
 と一く一ら一れ一を一啟一事一即一本一と一三一碑一考一と一載一多一く一と一ら一也一

文の意を六口と三口と合さく九人の男女知識を信ひく佛は伊予
 地と打倒して長く保せん設るれば遂に雨露損損横をさく何
 も知れぬ女とのみんより男より今と山上の文字消失金井
 澤の意と摺本と三碑考とありて此の如くも復難し
 抑此二つハ多胡の事を異にし私とのみあれ既廿二百年は
 くりり此の如く古き碑を上に覆ひるるる月未長く保
 けつと構へるとる也

明治十六年二月廿三日写

陸路乃記上十六ウ

上野國山上碑

辛巳歲集月三日記佐野三家定賜健
 守命孫黑賣刀自此新川臣兒斯多玕
 足英兒孫犬兒臣聚三兒長利僧母為
 記定文也放光寺僧

母古小録卷上十一ウ 日碑石山名村 山上ニ在
 リ按辛巳歲今考ベカラスト雖モ此文躰下賛
 郷ノ碑ニ似タレハ天平十三年辛巳ナラン碑

文解スベカラズ後改ラ待ツ集月古銅牌ノ銘
ニ戊子集月銘文ト有リ疑ハ韓語ナラム

上野名跡志初編卷中

十九丁

山上碑 小地名山名上ノ山ノ上ニ古碑有

上信日記ニ山名村ノ杖村山名上ト云イサ、カノ
ホリテ堂有リ堂ノ奥ニ石室アリ脊ヲコハメテ入
夏五六間ニシテ廣三間四方モ有ベシイト古ビタ
ル石室ナリ是古ヤンゴト無キ人ヲ葬リケニ石槨
ナルベシ後人コ、ニ佛像ヲ置テ堂ヲ構ハ添シナ
ルベシ今見ルニ觀世音ハオハセズ三面六臂ノ阿
修羅ノ像アリ是モ二三百年ノ物トハ見エタリ堂
ノカタヘノ松ノモトニ古碑アリト云 集古十種

ニ上野国山名村観音堂ノ碑、母古小録ニ上野国

集

山名村ノ碑、長三尺許、濶一尺、
羣昏一覽ニ行昏九行五十一字トアリ、
十種ノ字アリ、伏野ハ佐野ナルベシ、
母古小録ハ四行五
十種ノ字アリ、伏野ハ佐野ナルベシ、
母古小録ハ四行五
十種ノ字アリ、伏野ハ佐野ナルベシ、
母古小録ハ四行五

母古小録ニ按ニ辛巳歳今考ベカラズト雖モ此文

弊下賛郷ノ碑文ニ似タレハ天平十三年ノ辛巳ナ

ラン碑文解スベカラズ、後考ヲ俟集月古銅牌ノ銘

ニ戊子集月銘文ト有リ、疑ラクハ韓語ナラント云

金石私志ニハ直ニ天平十三年ノ碑ト云、上野三

碑考ニ辛巳ハ白鳳十年ノ辛巳ナルベシ、年号ハ大

化ニ始マリ、白雉トツヅキ、十七年絶テ、白鳳始マリ

シ頃ニシアレバ、此東ヘハ聞エズシテ、干支ノミ記

シナラン、集月ハ十月ニヤ、三家ハミヤケナリ、コハ

佐野ニ朝廷ヨリ三宅ヲ定賜也、其三宅人ノ姓氏ヲ

記シタル長利僧ノ記録ニテ、所謂系圖書ナリケン

ヲ、後人石ニ彫テ建タルベシト云、放光寺ハ今下佐

山ト云、寮其名残ナルベシ、然ル中ハ白鳳十年ノ辛

巳トイハル、天平寺ニテ、天平十三年ノ辛巳是ナルベ

シ、放光山天平寺、石坂ノ下ニ庵室アリ、本尊ノカタ

ヘニ平ナル野石建リ、来迎ノ弥陀ノ像ヲ刻テ、其下

ニ建治四年日正月日トアリ、後上野志ニモ見エ

陸路之記

上ノ
十七ウ

略^{上ノ}多胡碑^{所在} 略^{中ノ}飯玉社^{といふ}有り 略^{中ノ}二十町^を往^て山名村^{といふ}舟
 到^るハ幡宮あり 其鳥居の前^のを^もや^り申^す車^{より}
 坊^々山道^よ入^りま^く十五町^を行^き山^の上^と所^に古寺
 あり^{中ノ}其傍^{より}石階^をの^り十間^を行^き古墳^{あり}四方
 小石垣^をき^つ廻^らし^て碑^{あり}と^いふ^山上^の碑^{とい}ふ^所露^{あり}
 之^を消^失と^いふ^伴つ^て存^在即^ち摺^本と^いふ^{上野}三^碑考^と
 わ^らひ^し也^也 略^{中ノ}辛巳^年集^月三^日記^云之^の五^{十三}字^{あり}三
 碑^考此^年巳^歳と^いふ^{白鳳}十^年の^事と^いふ^{多胡}碑^{より}表^多し

定光集月十月多々一とつて多々ある佐野三家定賜
 とある佐野を金井澤の碑母贊郷とある同ト猶下るなり三家
 古書小屯倉とあり同トく朝廷の屯田のあり所小切なり
 其稻穀を納む倉と云ふ名有りされ此碑の三家と定光と
 多々あり屯倉置所を定光とありなり三家を後世三宅と云
 向同ト下
 略

明治十六年二月廿三日写

辛科神社神鏡銘

大勸進惟宗入道小勸進清原國包建久八年大才
 丁巳十二月二十六日漁大將賴朝

陸路之記 卷上第十二 明治十一年九月言 糸
 小曰く新町小着多々なり此中あり本
 縣小住あり吉田嘉蔬とあり人古き器物もくありあり
 多々の中に鏡あり表小文珠の獅子に乗るあり其右
 一尺三寸あり多胡郡神保村辛科神
 社神室とあり箱あり有し玆ら記あり

上野埴生郡八坂田八幡宮鋸口

銘

敬白奉懸上州埴生郡八坂田八幡宮
鋸口右意趣者天長地久御願圓滿別
面、所願成就也康曆元年己未九月
廿七日殊別一結諸衆敬白

先妣劍持氏墓誌

高山正之

先妣諱繁。平姓劍持氏。其先出自黃門平知盛。知盛之五男曰知邦。壽永中。未于武州。又移乎駿州。始稱劍持。改名則家。號重郎。以建長六年甲寅仲冬卒。年七十有五。其十三世曰盛。則以文學應聘。今川家。或以文或以武。世鳴乎駿中。又六世曰但州。乘忠。去駿城。屬小田原北條氏。勝武田勝賴夫人乎甲陽。及其滅。共殞命於天目山中。其子則政。卜居于武州。播羅郡。甚井莊臺邑。世長子邑。六世孫曰則康。號重左衛門。娶同郡古田氏。產妣。實享保十一年丙午夏六月。

九日也。九歲喪父。十四歸我。先考平姓高山氏諱正。教於上野國新田郡細谷邑。續產三男三女。伯曰正晴。仲曰正之。一女先夫。一男後殤。一女適高橋氏。一女居于家。以明和二年乙酉秋七月十七日終焉。享年四十。乃葬于細谷里中宅之西。妣歿之年。西遊中國。不及至。葬期悲憾徹心骨。攀慕何盡。速安永丁酉孟林伯之修墓述懷乎石。以昭不朽。不肖子正之俯告于壙中。億兆之世安。此玄宅。嗚呼哀哉。仲子正之謹誌。

神代之名殘卷五

高山貞正墓碑

高山正之

姓平氏高山。名貞正。字傳左衛門。元祿七年甲戌冬十二月二十六日。產於細谷邑。父蓮沼。圖書正房母高山宗三平繁久女也。貞正乃長子。嗣親戚之姓。稱高山。明和三年丙戌夏四月二十二日。以天年終焉。享年七十有三。葬于武藏國播羅郡臺邑圓滿寺。教哀慕。復封墓于斯。重之以碑。孝子高山正教。孝八謹建。少子蓮沼正穩。要右衛門謹助。

忠烈綱女墓銘

小野道熙

女小松魚漢父角左衛門之長女也甫十五歲家貧
 賣於吏卒杏見茂大夫家常令保抱其兒一日負兒
 出遊忽遇癩狗女慮謂嘗聞傷於癩狗者必死乃臥
 兒於地跨伏其上以身衛兒狗直來恣咬女到十數
 傷衣服為破裂全身流血而凝然不動其家驚赴救
 婦女曰吾死固其所也惟克得全吾願足矣既而傷
 甚劇熾醫療無效以明和己丑七月三日死嗚呼哀
 哉識與不識莫不感泣乃葬於西德寺中吾大侯維
 民之父母咨得其實矜其據義而死賜錢其父以褒

烏士臣等不勝感激。相共謀樹碑以旌其忠烈。銘曰。
維碑非碑。汝介維石。一片丹心。賤血永碧。

神代之名殘卷五

高山正教墓碑

高山正之

諱正教。姓平氏。高山字彦八。享保二年丁酉秋九月
二十一日夜。乃產於細谷村。正教者。真正之嫡子。母
大槻氏元文。己未歲娶乎劍持氏。承父之遺業。明和
六年己丑秋七月二十日夜半終焉。享年五十有三。
親戚護送。葬于斯。晴及之。等以期年七月二十一日
哀。謹表碑行祥忌。孝子高山正晴謹建。介子正之謹
助。

上毛羣馬郡力田遺愛碑頌

東江鴻麟撰并書題額

慶長七年壬寅秋元公諱長朝就封于上毛羣馬郡
始城總社之邑也。侯既奏庶富以本業而邑中稻田
數千畝無所受水。九年甲辰暨吏民戮力。率市決渠
開通溝瀆。隨利根川引流。凡獲田利為肥饒者計二
萬七千餘石。於今罔有旱魃為虐。洪水棄陵。咸侯之
績。後侯子孫移封於他邦。而郡之父老子弟猶相與
謳謠其功德而不忍忘。遂勒其夏于石樹之侯廟前。
以示永永。謁余作頌。其辭曰。

侯昔益國。受方啟封。總社既築。言言崇墉。惟侯夤政。思戢用先。決渠灌漑。利川洋洋。始播百穀。厥田惟良。制產有恒。以享我鄉。民人所瞻。念是懿德。萬億豐年。惟侯之力。祠宇斯立。神鑒孔明。勒石永立。用垂頌聲。安永五年丙申十一月 百姓等建

明治十五年八月十日

蒲生先生遺稿卷中 三十九

高橋重大夫之墓碑銘

蒲生君平

丈夫之處世。自王公以至庶人。苟知人所以能參天地。宜尽才力垂功德。而有利澤於生民。使千載之久。尚不忘焉。然而其業惟隨位之崇卑。有安利天下。有安利鄰里。鄉黨所安利。虽有巨細。乃至如其志。一皆有人。所以能參天地。烏豈可令与禽鳥均死。草木同朽哉。必當撰史傳銘金石。与天地日月無窮其名。今如上莖高橋君。實有利澤於生民。及於死之後。使人不忘。益嘗以温厚慈惠。抱文武之器。臨政有明斷良策。稱於一國。所謂大人長者也。其五績尤可稱者二。

實是鄉人所依賴，故鄉人欲建碑錄功以不朽之。造
聞余文辭有志於今世，故執贄一見而言其概略。上
莖新町之里，君所家也。家大農而有良田若干町，世
勤儉致富，為鄉望族。及於君，以身為宿老，嘗視其里
之利病如家有之也。凡西北後園之衆，貢獻之多，道
路給繹，日以相尋，莫不皆經此里，供給其用，則取取
急速，農人夫走耕，為民之所以為生產，必由是窮乏
幾索所在皆如此，而當宿最甚，惟君有仁惠，以宿老
親民之職，藉家五豪富之資，不忍於小民困窮，一朝
決然建良策，計宿中經費，而發家財六白金，併墾田

二町，請於官以永充其用，莫在安永年中矣。至于今
宿以其金息利得能出人馬，又令役夫力作其田，而
粟亦有儲，竊考之王制，古之驛必隨其路之大小，所
在置驛田，厥取於民有三法，曰租調庸，租者田之所
當出，度地以居民，計口以班田，田不過二段，而租不
過三十之一也。調考戶之所當輸，任其土宜，使以調
布帛，庸考丁之所當役，男夫自年二十一至六十為
丁，丁歲役十日，而不役者出其力之所直，以為役之
庸，若其有加役及二旬免調，及三旬租調俱免，自王
制之廢，而天下喪亂相繼，政成於武斷，卒惟使年貢

其祖以其歛之厚不復取調庸故工役輒募今夫方
平日久民無不安息獨行路之役募民以田宅多寡
之額方受其病不免咨嗟而新町自君有斯舉始忘
病焉至以其所墾膏之驛田是間有復古之端可謂
丕績矣上野烏川鐫川歷新町而東入刀祢有津焉
日致舟筏之會宿而民受其利在君歟適其津已廢
君為之奮然費資不憚其勞請於官而再與其利更
在天明二年矣至於今里由此舉烟若多可謂丕績
矣此二功鄉人所依賴是以今方不忍其經久遠湮
滅漸尽至以忘其遺烈故欲碑其墓以紀其績焉而

請余撰其文也君布衣而有仁功已如是設令君在
茲王公赫赫之隆位則其澤之及於下民不啻為為君
可深惜而為新町之里可姑慶蓋君讀昏慕古人雖
無常師亦愛客下士以暇之暇共講學於其堂又頗
善擊劍惟其質之美卒克成其德嗚呼乃斯人而其
亡已久以天明八年四月二十一日卒於家春秋五
十五墓里之寶勝寺先塋側方思其德可為悲傷君
諱直之稱為重大夫其族曰高橋父諱某娶戶吾氏
生君焉君妻吉江氏今建碑若君之孝子為定及君
妹之子三侯榮章而欲文辭以不朽之圖鄉之志也

余方偉甚，夏而銘其碑。銘曰：
 所貴財多者，以能救敗利民也。伊人在斯室，其名永
 在於國人歟。

泊酒文集卷下

翁氏波平名波秀龍字波道雲止云倍常亦此字乎
 以豆已毛呼比人母呼婆禮別爾金鷄毛止云倍常亦此字乎
 利世：上毛乃七日市乃里所領君爾仕倍醫師乃
 業爾名高支加利然爾翁弱冠之利時與風流乃道亦
 心乎造呂俳諧歌乎母年餘利遠久四方乃海山亦
 遊久婆末思奴波禮遂爾齡三十餘六互之仕乎退互京
 師尔久婆末思奴波禮遂爾齡三十餘六互之仕乎退互京
 末良礼始波市乃中尔隱住之波礼後江户尔足乎留
 多利支乃里尔月花乎愛互文化六年止云年正月
 留槁場乃里尔月花乎愛互文化六年止云年正月

金鷄隱士之墓
 年正月十日
 清水濱臣

廿一日齡四十餘三
國高尾苗那長學寺止云布山寺爾斂德奴翁醫師乃
道爾與利互着之左禮書波金鷄醫談止云苗有利俳
諧歌乃料爾戲爾書互世爾刊布多留禮書大率十種
亦及倍利翁男子三人女子二人乎生利嫡子時倚
今猶翁乃跡乎繼互七日市乃君爾任布時予泊
酒舍爾訪來互古言學乃道乎學利今年時倚彼長
學寺留那奧榔乃倚爾碑建未欲互我皇御國乃古言
乎以互彼碑爾書付未思布由乎予爾乞利予翁止
一度面識之事有戎字倍爾時倚今予爾物學須禮

否備不敢互之事乃狀片端書都久爾留奈毛有留氣

刀祢川治水碑

二月十日、雨の多き日とある事、一日も其の羽
生里の彦兵衛、骨標は、曉より日くまき、夫の如
き所をいふ事、見あるに、同く心を合啓す、
南大島村の名主、三入の事、見ありあり、又同じ、羽生
里乃名主、清水弥右衛門も同じ、心く、治水の事、いひ、
かき、あひ、お、事、は、ち、を、記、し、や、心、を、言、ひ、し
い、し、記、し、し、丹、南、有、り、又、玉、井、村、の、醫、師、大、濱、玄、道
君、の、事、小、夫、の、事、お、い、ふ、事、川、入、を、思、を、い、ふ、小、あ、る、事、
病、を、煩、ふ、事、の、事、い、ふ、事、病、を、い、ふ、事、い、ふ、事、い、ふ、事、い、ふ、事、

大濱玄道

行 刀祢川乃大川水乃川水乃水乃阿良備波迦志許伎呂迦毛

宇惠志田毛麻伎志波哆氣毛大水乃水乃荒備尔流失氣理

田波哆氣毛民乃家居毛大水尔野登奈里川登奈礼流悲毛

毛乃作琉民波御哆迦良古由大御哆迦良登言都義来哆理

表 其登許呂預知礼琉都迦佐人民表阿波礼美助氣哆麻閉理

司人里乃長壽登言波迦理淤許志迦閉志志田波哆氣功志

野登成互荒哆琉處田尔波理互本乃如尔奈勢琉伊曾志毛

子孫乃五百年十年後麻互毛字礼志伎許登波言継尔勢典

表 愚玖奈理吉奈琉又天地乃神乃志和射曾神乃智波比曾

表 大年乃神乃惠表字礼志氣玖淤毛比互作礼田作琉田比登

愚伎風荒伎水尔毛合勢受互幸波比麻勢登神尔許比乃米

表 伊迦志穗尔幸麻勢登大年乃神乃御靈表許比乃美麻都礼

表 荒志田表起復志互千代遠玖哆互志功波伊比都義尔勢典

本乃如成琉田波哆氣萬代尔里比登乃哆米毛呂比登乃哆采

天保四年癸巳春

紀伊殿家人本居三四右衛門平大平歌十五詠書

窪世祥鑄

故因幡守仙石公廟碑文 龜田綾瀨

古之人有功著一方。德蒙後世焉。則勒之金石。置之廟堂。百代崇祀。香火不絕。所以報其德者至矣。謹案上毛磯部村。舊仙石因幡守源久俊公封邑也。地固高燥。無灌溉之用。遭天雨澤。始能施耕種之功焉。若夫雨暘錯節。旱魃為虐。則土焦種槁。野無青草。阻飢之嘆。連起。公特憂之。寬文中。上疏請官。曰。臣封邑磯部村。祿凡二千石。土高壤燥。灌溉乏水。荐遭旱乾。民生不遂。臣甚哀之。欲穿溝導碓氷之水。而溉之力。微用不給。伏請獻臣封邑於官。更賜臣他邑。此地

得浸漑之用。則一方生民。世々饒富。永浴上恩。
歡。上乃允其請。發徒起役。衆皆歎焉。執器操用。而就後
者二萬餘人。渠長千五百餘間。事二旬而成。河水奔
橋注。鄰邑大竹村。亦得浸潤之利焉。於是橋壞易而汰
土見。怨嗟息而歡聲作。村民相議曰。河水東流。庶種
荐登。使吾永免艱阻之患者。皆公之賜也。乃建廟祀公。崇其號曰。稻葉大權現。每春秋迎余公神。恭修祀典焉。使文勒之於石。建之于廟門。使永水世無遺
公德焉。因又作銘。銘曰。
碓氷之水。滾滾東流。百穀蓁蓁。以盈于疇。惟公之德。
差。蓋。代歎以謳。清酌庶羞。惟享惟酬。

如不及齋文鈔卷下 三十一
菅公神廟碑

藤森天山名大雅

嗚呼。大節明天地。至誠孚萬世。若我菅公者。窮海內。
亘古今。一人而已矣。蓋公發迹於儒林。一朝陞居。勲
戚之右。當是時。幼主踐祚。公任重勢疑。嫌謗易生。况
姦臣構讒於內。而諛臣又隨而媒孽之乎。外公之不
終宜矣哉。然危疑之間。人或勸退。公奮而不顧。欲上
為天子除百年之積弊。下為萬世明君臣之綱常。易
有之。蹇之九二曰。王臣蹇蹇。匪躬之故。公之進也。蓋
用之。及公獲罪去。姦諛遂得志。乾綱之不振。職此之
由。而公忠愛之念。抵死不渝。眷戀闕庭。思慕君父。往

往見之於歌詠。毫無怨懟之意。易有之。乾之文言曰。不見是而無悶。公之退也。蓋用之矣。是所謂道理貫心。肝忠義。填骨髓者。實人臣之大節。非至誠而能之乎。夫誠之至。感神明。況於人乎。是以凡在中國者。戴髮含齒之類。莫不尊親。廟食遍於海內。千載猶一日。豈不盛哉。桐生之尤尊親公。奉祀為鄉社。蒸嘗不人。懈有事必祈。天正十九年。東照公下教。置祀田二十石。越九年。關原役起。欲多張旗幟。以盛軍容。初八幡公過此鄉。命民上絹及竹竿。取以作白旗。遂平奧賊。公乃遣主計頭平岩親吉。授八幡公例。下令於五十

四邑。刻日織旗絹。盡所獲數。併旗竿上之。獲絹二千四百一十匹。鄉民各持所織。會於神廟。祈戰勝。併符章上之。軍遂大捷。乃命歲貢旗絹。依其數為額。併除所採旗竿竹林稅。民亦必會神廟。為幕府祈隆運。併章符上之。歲以為常。寬永中。更命代絹以錢納。若干嘉永五年。士子為公九百五十年忌辰。邑民以為梅花公平生所愛。乃集同志。勦力闢園於祠側。多栽梅花。亦尊親之一端也。其明年。余遊桐生。石原義章告田某。欲碑祠廟。所由以示永久。乞余文。乃為書之。係以詩辭曰。

福田浩齋墓表

野口松陽名常

當文政天保之間。修洋學者。屋々樓指。其崛起。僻落磨礪。研鑽克自。樹立者。豐後有帆豆。愚亭氏。上野有福田浩齋翁。愚亭長於窮理。翁精於醫術。要皆絕特。卓異之士。而愚亭撰述。風行于世。為士林所稱。翁則其名不出隣境。豈以其著。昏未聞。離耶翁。幼母誦昏。長入江戶。執贄市河。寬齋之門。既而從二宮洞庭。學古醫方。及歸鄉。業頗行。嘗療一病夫。不治。遣談某氏。所譯荷爾。醫昏論。病理藥性。甚悉。試之立驗。翁之技。蓋自

是變矣。居久之，自奮曰：閱他人譯，各猶隔靴搔痒，不若紬繹原旨，以窮其蘊奧也。於是延善蘭學者而館之，始受其文典，時年四十一矣。而翁醫名大噪，乞治者，膚至晝，執刀圭，夜則繙讀，兀坐守燈，至鷄鳴不已。如是數年，學大進，乃譯傑氏見十卷，著病名辨疑四卷，將上梓，未果而逝。翁為人豪宕，自喜，然其處，接人，恂，幅，朏，摯，循循如也。邑有溫泉，浴客頗多，其病且窮者，益給藥餌，癒，則周路資遣，歸，歲率數十人，事聞于邑主，清水侯，侯厚賞之。人有勸翁仕者，翁笑指架。

上昏冊曰：我祿在斯矣，其不為利達所累如此。翁無他嗜，每意有所適，輒命酒賦詩，歌吟，歎呼，苟若無又，飲，累日，心神不亂，嘗在高壽，用宴賞，花會，藩，執政某病劇，請治，翁擲筆而往，診曰：是脫疽也，斷則活，不斷則死，衆醫相顧色然。翁徐援刀，既癒，贈傳家馬鞍一鞞，為謝云：翁諱太忠，小字德郎，稱宗復，浩齋，其別號，吾妻郡澤渡人，生於寬政三年某月日，沒於天保十一年十二月廿八日，享年五十。明年正月十日，葬上村先塋之次，配木暮氏，男女各一，男名文同，典，余相。

識具翁狀。可余文。光幽宮。嗟夫。明治中。與洋學
盛行。十室之邑。必有解橫文者。而達識精業。如
然。及愚亭其人。世未多出。余安得不慨。華援華。而
表翁墓乎哉。

明治二十二年二月十五日 芳野 寫了 芳野

竹香佐羽君碑

東京 芳野世育撰文

明治元年戊辰冬十月二十日。竹香佐羽君沒。
年六十。窆于淨運寺。後八年。予過桐生。君之子
秀及瑯。泣謂予曰。先考畢世勤儉。恢弘家道。

其功甚偉矣。將乞文名賢。鑄諸貞砥。使雪耳無
敢忘失。秀等待其人久矣。願先生銘之。吁。予豈
其人。雖然。感二子之志。且偉君之所為。因叙其
所聞。曰。君諱澄。字秋江。佐羽氏。通稱吉右衛門。
竹香其號也。上毛山田郡桐生邑人。考諱芳。號

澹齋妣福田氏。世以商立業。產頗殷矣。澹齋夙
以詩為藝苑所推。文雅風流。不屑世。博愛好
施。以故聲價雖重。家貲差損。而毫不置意也。其
沒。君年十七。竊謂易曰。幹父之蠱。有子考元咎。
苟不任幹。蠱非子也。乃奮發懋力。壹締思于此。
日夕劬如也。一鄉皆業機織。而慣舊法。無新工。
君有巧思。使其新製機械。泛募名手。以投貲。尚
於是人人摹倣。所織精巧。頓改面目。先是天下
推西京西陣。未數年。聯鑣駢馳。既而至。超而乘。
蓋君之化也。當開三港。始貿易。君先衆。敗賣海。

內外皆知君之名。其富什佰前。敗焉。而自謂不
寸進。則必尺退。理勢然。宜矣。行百里者。半九十
也。因日喻子弟曰。勤無價之寶。儉治家之本。泉
雖善。涌汲之衆。用之急。則竭矣。蓋克難克成。難
成者。忍之功也。吾克忍而勤。忍而儉。所以達志。
汝儕其銘之。心肝庶幾得守成業也。欽。君夙母
荼儀。愛古。書畫。嘗受畫訣于谷文。昆學禪理。
于爽堂和尚。其文雅風流。不減迺公矣。而以急
於幹。蠱一切廢之。又戒子弟曰。古有以惜費為
一樂者。苟費也。一緡如丹砂。可用也。萬金如塵。

擊
土。故雖云克己切擊。而及凋凶荒恤困厄。則極力樂而為之。慶應年間土人苦兵革。直捐三千金救之。比之世之守錢虜。星淵不啻也。天保中嘗營室東京。又僦居橫濱。數往來。勤劬四十餘年。猶如一日。竟以致殷富矣。原配名照。長門宣澄女。先沒。再娶東京小寺某女。利生男女各二人。長慶次郎。次秀嗣。長女名益。養且利。湏永竹溪之子。克配焉。秀志氣雄鷲。不屑逐利。因使克承後。次女福。長門保久。乞而養之。名護屋岡田。西月男。邦。故有才幹。因夙養之。使督商。夏。殆

三紀矣。君致殷富。邦故与而有力焉。配女弟信。別作室。以為分親。銘曰。知無價寶。務治家本。克勤克儉。幹盡孔善。惟孝惟順。忠養婉愉。豈特範家。嗟乎其有感焉。而興者也乎。

內務卿正四位勳二等松方正義篆額

一等編脩官從五位巖谷修書

明治十三年十月建

廣羣鶴刻字

碓氷郡新道碑

群馬縣令造五位楫取素彦誌

上毛國碓氷郡鄉原村至橫川新道。明治十年
三月起工。八月霖雨暴漲。權停工。至十二年
十一月重修。以十三年十二月訖功。填深鑿峻。
其長一千五百七十七間。用官金一萬九千百
六十九圓。用工夫八萬二千五百十四人。坦道
一線。車軌始通。行旅便之。僑屬某某等監工事。
既成。羣馬縣令楫取素彦。燕飲落之。且建石紀
工。更起止。以傳于末世。

明治十四年秋九月正五位日下部東作書

瑾亭安中君墓碣銘

文部權少書記官從六位依田百川撰
修史館一等編修從五位巖谷修題額
安政乙卯歲八月余薄遊上毛抵高寄問土人
以文雅之士答曰保渡田村有安中文瑛者以
醫為業善詩文溫雅君子也余大喜訪之文瑛
欣然延余款晤叩以學術文章余因出示所得
文瑛認以余為知文者推重不置屬以其有梅
居記余以遊方有期不得久滯一宿辭去爾後
倍更翊集不暇作然每遇佳風月未嘗不想見

其溫藉之容清雅之粹也。今茲壬午二月文瑛
友人牧野再訖未通謁曰文瑛歿矣門人相議
捐資建碑以記其德文瑛嘗曰先生余知己也
墓碣之文非先生不可烏呼余於是屈指數典
文瑛相晤之日則距今二十八年矣其所囑文
未果作余則負文瑛矣墓碣之銘豈得辭乎按
狀文瑛名瑛號瑾亭世住保渡田村其先曰范
二位源重國自稱征夷將軍宗尊親王七世孫
其二十二世曰安中忠親長享中在碓氷郡松
井田城其子伊賀守忠清移榎下城生越前守

忠正忠正城野凡名安中城使子忠成居之忠
成後武田氏戰死長篠弟曰忠基走出羽寬永
三年還匿民間子忠惟住保渡田村傳子忠富
始業醫傳立元立榮立榮子曰禎字玄祥號俞
俞葦業大行又善書及墨梅乃君考也妣羽鳥
氏君繼箕裘厥業益盛嘗游江戶受業於幕府
醫官多紀安井又母學師鈴木藤陰為人溫知
質懇竭力施治病者賴之遠近請治者履常盈
門嘗讀西洋醫書幡然有所悟曰漢法未精藉
此以補可也益究其術方是時西醫之術未大

行于世。人或以為怪誕。君獨知其可用。豈非豪傑之士乎。以是門人子弟稍通其術。至今效益著。獨為怪為誕者。後悔無及。烏呼。是一豈足以傳矣。君老厭。丑夏。遂去。保渡田村。寓本郡箕輪。関叟菴。優遊歲月。以吟咏為娛。以明治十四年七月三十一日歿。享年七十一。葬保渡田南。母先。幽之次。君娶志村氏。次濱田氏。次小林氏。皆先歿。子二。曰禎。三郎。嗣。次曰彦四郎。女四。長。適藤井氏。次。適川保氏。次。適若山氏。次。未嫁。余謂再誌曰。余初與文瑛約。作有梅居記。不果。常以

為恨。今為撰墓銘。請以有梅居銘代之。且以君清雅溫藉似梅也。乃銘曰。
欣厥高節。愛厥清芬。衡門栖遲。全茲天真。風標宛在。梅耶人耶。

明治十五年三月

正五位 日下部東作書

廣羣鶴刻字

伊勢寄招魂碑

參議兼陸軍卿陸軍中將正四位勳一等大

山巖篆額

伊勢崎舊為酒井氏治所者殆二百年以其休養日
久人民知義方明治十年西南有事下符全國以徵
兵而伊勢崎地方應募者若干人九月王師戡靖錄
死者負傷者其係伊勢崎者九人矣板垣圭次以是
年二月十日戰死於肥後二俣村関大弥山岳彦三
郎以五月八日戰歿於久木野村真鍋益治魔島雀
宮之戰墜于崖下傷膏以八月七日死于病院下城

嘉造田嶋源吾^告栗原萬吉皆罹惡疫死於大阪病院
嗚呼某等應募之初奮勇蓄銳不期生還又固得所
者獨在其一家之情則有可悵者焉舊君酒井氏有
感於此與地方有志者謀建招魂碑以吊慰之其志
蓋敦矣余管本縣十年於茲伊勢寄地方士庶各服
力作民產略足在他部落則每年徵兵人民忌避管
靡徃、難其區處然而酒井氏舊管未聞是弊豈非
其極御得宜士庶亦知象之故哉况如西南役生者
有勳章之賜死者享官祭之典不止傳名譽於御堂
乃死而有榮矣於一家骨肉之情可亦無遺憾也今

茲九月酒井氏請余記之石十年之役余奉旨傳檄
於管内恐思從軍其死也不可無一言因不辭而記
之

明治十五年壬午秋九月

羣馬縣令 從五位勳四等楯取素考撰文
內閣大書記官從五位勳五等金井之恭書

廣群鶴刻字

井上加納壽藏碑

編修副長官從五位重野安繹撰文

上野邑樂郡上小泉村有井上加納以筆札誦誦教
授鄉里四十年。從學者有四百餘人。胥謀樹壽藏碑
以表師德。令人乞余文。碑者悲也。所以悲死者壽藏
碑非古也。然表師德於世。欲及其生也。合於古者尊
師之道。君子有取焉。乃按其狀曰。加納名良昆。字文
慶。加納其通稱。井上氏家世修。騷者幼喪父。鞠於母
氏。受業下野人松浦南碩。又游武藏。從市月者。學俳
歌。既歸下惟教授。初加納為修。騷者年二十九至大

明治九年七月十四日寫

和登大峰遂任大僧都明治初復飾夫加納役氏之
後也役小角入山修道三十年巖栖窟宅凌歷險阻
故役氏之道以勤苦堅忍為主加納教授四十年如
一日豈非有深得於其道乎小角之獲罪而亡官拘
其母則出執終與母偕隱焉於親也今加納講學里
中訓迪子弟諄々弗倦其為人倫可知矣其後之汲
汲乎表師德蓋亦有所化也中興之際府縣爭建學
聘師加納亦被辟以老疾固辭不出年今六十有五
生四男一女長子多滿龜為本村長良祠官

明治十六年四月內閣大臣記官授五位勳五等金井之恭書并篆額

唐犀鶴刻字

明治十九年七月十五日寫

大谷休泊紀功之碑

步兵少佐兼豫定官二品勳一等貞愛親王

篆額

今上即位之十有四年置農商務省尋設山林局大
張林政明年奉山林共進會令國內有功於森林者
不問其人生死盡錄上焉於是故大谷休泊膺三等
賞賜金星銀盃於裔孫熊倉某以旌其功嗟夫休泊
死而不死也抑休泊者族藉鄉貫無記傳可徵或謂
天文中上杉憲政居上州平井城休泊事之憂州多
不毛地而居民亦寡按水理通溝渠以便灌溉於是

得水田數百町矣。又相土性，藉其尤粗惡，不適菜穀者，以殖林。而州內之杏，對獨太田金山松，豈蕃茂。乃抽稚杏數十萬株於金山，栽之曠野。初事於永祿元年，經二十年前，棘之地化為茂林。即今大谷官林是也。夫天文、永祿間，天下擾亂，羣雄割據，使休泊效力於兵馬乎？割據一方，亦非可難也。乃舍彼取此，意其人雋偉，非胸中別有所見者，安能好此乎？余嘗過平井村，視其城壘，荒烟野草，僅認廢濠。到邑樂郡，經所謂大谷原，則喬松森立，蒼翠直數里。其西有休泊渠者，引渡瀨川，縱橫分流。每播種之候，深湛汪洋。至今

數十村賴其利焉。蓋方憲政襲父祖遺業，號令關東，可謂盛矣。然而後世子孫，歸於湮滅。至今日，則平井村人民，猶無稱說憲政者。如休泊在當取，雖無封爵之可記，數百歲之下，土人猶懷其德。朝廷追賞其功，則視之上於氏得失，果何如哉？余益信威力之不可恃，而德惠之不可忽也。館林之地，接大谷原杏林，中有休泊墳。頃者土人相謀修之，且卜地於躑躅畷，記其事于石，以傳不朽。今郡長村山具瞻乞余文，休泊余所嘗欽，故不辭而書之。

明治十七年五月

羣馬縣令正五位勳四等楫取素彦撰
内閣大書記官從五位勳五等金井之恭書

東京廣羣鶴刻字

明治五年七月十日寫

改夏新報六百九十六号明治十七年六月廿七日

紀念碑

羣馬縣下上州館林ノ産ニテ故大舎休泊ト云ハ
ル人ハ在世中山林ノ事ニ關シ功勞アルヲ以テ
同地方ノ有志者ガ申合セ同地字躑躅カ岡ハ一
ノ紀念碑ヲ建設スル由其篆額ハ伏見二品親王
ノ染筆ニテ文ハ楫取羣馬縣令カ撰シ書ハ金井
内閣大書記官カ認ムルト云

明治日報千二百三十八号明治十八年八月十二日

御蔭松碑

芝中の松のやどりに千世を承る残る君に御蔭有り
ついで明治十二年七月廿日皇太后宮伊香保の温泉
に行啓在せ給ひ一昨芝中の松蔭に暫く玉輿
を駐免させしむいづれに供奉せしむ一萬里の路
博房卿が芝中の松の云々と詠みしむ其を石に雕
く松下の建ししむこれに御蔭を唱ふ其れ
し三條相国をば久朝野の士民の玉詠百首に餘
しし尚此松の言は葉と千歳を傳ふ人しし上野
国東羣馬郡渋川驛を堀口貞敬湯上村を狩野村

房の兩氏々首唱者とあり、御蔭松と云ふ題あり、廣
く世々歌哥を請はし、由云々

